みたいと思っています。

■ カポエィラを無理にアフリカに関連づける必要はないのではないか

ウスビ・サコ　いろいろなコメントをありがとうございます。ホザンジェラ先生の話で出てきた「ンゴーロ」の話は、以前読んだ文献に書いてありました。その儀式・儀礼は戦士が準備をするためのものでした。植民地支配者や、それ以前の支配者がやってくるときにどう対抗するかという儀式・儀礼があって、それとカポエィラが関係性が強いのではないかという説があるのはたしかです。

ただし、一方では、それは無理やり関連づけているのではないかとする研究もあります。先ほどのホザンジェラ先生のコメントを考えると、やはり立場を分けて検討する必要があります。ブラジルの人たちは、カポエィラのアフリカ性のために意味づけをしようとしている。「アフリカと関係があるんだよ」、「アフリカから来ているんだよ」と。しかし、それをなぜしなくてはいけないのか、私はすごく疑問に思っています。

私たちから見たら、べつにそこに意味づけする必要はない。ブラジルに連れて行かれた奴隷や黒人たちが作ったものである。これは変わりはないわけです。起源がアフリカにあるかないかに関係なく、作った人に重点を置くことが、一つのものの見方ではないかと思います。ですから、先ほどの身体性の話で言うと、アフリカに残っている人たちのある種の身体性には環境の違いがあるので、少しそこの見方が違うんじゃないかなということが一つあります。

シンポジウムには、カポエィラの実践者、ブラジル研究者などさまざまなバックグラウンドをもつみなさんが参加

■ グローバルなスケールで文化の輸入、逆輸入、混交を捉える可能性

サコ　もう一つ、いわゆるアフリカの現代文化について、我々から見たらかなり「極められた」踊りや格闘技などが逆輸入されてアフリカの現代文化を支えていると思っています。先ほどキューバ音楽についてもそういうことを言いました。

もう一つ興味深い現象がアフリカにあります。日本でも美容整形の話がありますが、アフリカでは皮膚の脱色が流行しています。とくにコンゴなどの地域では、みんな白くなりたいという思いがかなりある。それがいろいろな皮膚の病気につながったりしてたい

エッセイ

体験講座で感じたアフリカの歌や踊りとのつながり

大石 高典　総合地球環境学研究所プロジェクト研究員

カポエィラのワークショップ、シンポジウムには仕事の都合で参加できませんでしたが、9月13日の「楽器と動き」の体験講座に参加させていただくことができました。GCAPのメンバーの方からレクチャーを受けながら、ジンガの基本姿勢、攻撃のよけ方、蹴りの基本を手取り足取り教えていただきました。汗をいっぱいかいたのがとてもよい思い出です。攻撃が同時に守備でもあるという考え方も新鮮でした。

講習の中で、特に記憶に残っているのは、メストレがおっしゃった「どんな姿勢を取っていても、どのような状況でも、相手をよく見るようにしなさい」という教えです。ちゃんと相手が見えていないと、自分も相手も怪我をしてしまう。安全に楽しく技をかけるには相手を見ることがとても大事であると。強い、弱いを見せつけるようなタイプのカポエィラや時として相手を殺してしまうことさえある格闘技としてのカポエィラもあるけれども、メストレの流派のカポエィラは相手を傷つけることが目的ではないのだとおっしゃっていました。どんな相手であっても、相手をよく見て、力を加減しながら一緒に踊ることができるというあり方に感銘

へんなのですが、なぜそんなことをするのか、いつからそんなことを始めたのか。その流れを見ていくと、アメリカからの逆輸入の文化の一つなんです。

アフリカから連れて行かれた人たちからすると、アフリカとのつながりは強く見出したい。しかし我々からしたら、彼らは最先端に近い。アリエネーションの話をしましたが、いわゆる支配者のそばにいる人たちは、支配者の直接の影響を受けて「極められて」いるものを持っているから、我々は彼らに憧れをもってしまうのです。そういう矛盾があります。

離れた地域についてはそういう話はしやすいのですが、グローバル化のなかで垣根がなくなったときにこれをどう見るのかということが、興味深いと思います。地域ごとの文脈で見ると、オリエンタリズムに持っていったりする解釈はあるかもしれませんが、世界的な規模でものを見ていくと、また違うものの見方、文脈が出てくるのではないかと思います。そのときは日本人であろうがだれであろうが、あまり関係がなくなるのではないかと私は思います。簡単にまとめると、カポエィラはブラジルのアデンティティをもっているが、世界的に行われている格闘技であり、その際は起源がどこであるかは関係がないかと思います。

■ カポエィラの存在を支える留め金としてのアイデンティティ

輪島裕介　大方重要な論点は語り尽くされている気がします。私なりに話をまとめると、文化というものが、変化をする、境界を越えていくことは、現代に始まったことではないし、当たり前の状態だと思います。それはむしろ結論というよりは前提の話です。そのなかで、それを切り分けていく振る舞いも、やはり同時に起こっているわけです。

それはある種の固定的なアイデンティティに囲い込むことなのかもしれませんが、そのなかでの矛盾というか緊張関係が常に起こっているということなのでしょう。それについてなにか結論的なことを言えるかというと、そうでもない。

今日のアフロ・ブラジル文化をめぐる話のなかで繰り返し出てきたのは、それはかならずしも地理的な、テリトリアルなものではないということが一つありました。むしろ神話的なものであるという話です。それから、講演でも出てきたと思いますが、単に肌の色の話でもない。血統の話でもない。

ただし、すべてなんでも流動しているということであれば、それはカポエィラである必要もないし、アンゴーラである必要もないし、アフロ・ブラジル、アフロ・バイーアである必要もなくなってしまう。それはたぶん違うだろう。その意味では、ある種の留め金というか重し、そのようなものとしてのアイデンティティは、やはり必要だろうという気がするのです。

これは流動的ではかないものなのかもしれませんが、どのようなかたちで経験され、生きられるのかみたいなことを考えたとき、やはりそこに身体が顕れて

を覚えました。起源は奴隷解放の闘いにあるのかもしれませんが、地域や民族を問わずにカポエィラが受け入れられ、多様な形態に展開していること自体が興味深く思われました。

私はカメルーンで人類学の研究をしています。カポエィラが同じアフリカ大西洋沿岸のアンゴラと深く関連するということを知って、アフリカで見聞きしている歌や踊りとのつながりにも目がゆきました。

円形に人が輪を作って、その中から順番に輪の中心に出て行って試合を行ない、ひとしきり掛け合いが終わると輪の中にまた戻ってゆくという形式は、私の調査している村でよくみられる踊りのやり方ともよく似ているなと思いました。

ちなみにそれは、極めて単純な踊りなのですが、いつまでもいつまでも続けることのできる踊りです。また、格闘技ではありませんが、踊り手が、各々に動物やハンターの真似をしながら掛け合いをする踊りがあるのですが、それに似たものを感じました。一方で、私は逆立ちをしながら回転する踊りや格闘技をカメルーンで見たことはありません。また、カポエィラは、男女ともに平等に参加できるのも魅力だと思いました。

わずかな時間でのカポエィラ経験でしたが、カラダのやわらかさだけでなく、アタマやココロもやわらかくないと華麗な技の掛け合いは難しそうです。いま、私は近い将来にカポエィラに本格的に挑戦できるように、まずはヨガを習って身体をやわらかくしているところです。